

新荷雪間の市川 (新山姥)

嘉永元年(一八四八)十一月江戸河原崎座初演。三升屋二三治作、四世岸澤式佐作曲。

坂田金時として頼光四天王に出世する怪童丸の門出譚。山賤斧藏にやつした源頼光の家臣である三田仕が、怪童丸の勇力を見出す場。母の山姥丸(坂田時行の妻)は四季の山廻りを舞い、別れを惜しみながら去っていく。

〱四面峨峨たる足柄山

〱麓に通う椎が本 巖に染むる蔦蔓 君命受けて丈夫が曲

げたる肘の高枕 げに一瓢の楽しみの 眠りを覚ます山風

山賤「山高うして雲行客の跡を埋む、君命受けてこの日頃、斯

く山賤と様を変え、深山幽谷嫌いなく、行き成り次第の気

俣酒、眠た覚ましにドリヤ一杯やるべえか」

〱酒量りなき盃に 注げば映ろう星の影

山賤「アアラ怪しやなあ、客星ここに拱くなし、我が盃中に

影さすは、さては一定人傑のこの山中にありという天の

知らせか、何にもせよ奇異なることを見るものじやなあ、

ハハアこれで読めた、心当たりは山住みの女が連れ来るい

つもの小僧、ドリヤ一服喫んで待つべえか」

〱錦の袂 引き替えて 木の葉衣を露霜に 染めてあげるの

山姥と 人や岩間の苔清水 心細道たたとと 杖を力に歩

み来る

山賤「才お袋、今日はまだ逢いませぬの」

山姥「才山賤の斧藏殿、また焚き火のご馳走しましょうかい

のう」

山賤「それは忝ねえ、時に小僧はどうしましたな」

山姥「さればいの、あとの麓まで連れ立って来ましたが、大方猪

猿を相手に相撲がな取って、いましようわいな」

山賤「それは危ねえ、早くここへ呼ばっせえ呼ばっせえ」

山姥「ほんにまあ、疎ましい事ではあるぞいのう」

〱アア疎ましいと託ち言 それと見つけて

山姥「あれあれ御覧じませ、あのような大きな石を弄んで、

道草も程がある。こりや怪童、怪童丸やあい」

怪童「才オイ」

〱神楽月とて片山里を 笛や太鼓で面白や 足の冷たいに草

履買うて給れ 〱子を捕ろ子捕ろ どの子が目つき あとの

子が目つき 〱かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出や

る 夜明けの晩に つるつるつるつるつった 〱木の根 笹

原潜り潜って ひよいと出た緑兎

山姥「コレコレ怪童、早うおじやいのう」

怪童「アイ」

〱母を慕うて山道を 尋ね木咲の梅の花よき

怪童「母、おらこんな花折って来たよ」

〱花打ちしようと振り立てて いたずら盛りぞ愛らしき

山姥「才才よう戻っておじやったのう、サアサアいつもの通り

小父様へお辞儀じやお辞儀じや」

山賤「才お辞儀か、よくできましたな」

怪童「母様、何ぞくだされや」

山姥「おとなしゆう遊んでおじやったその褒美に、この間から赤の衣服織って着しようと思つてな、山路巡らぬその暇に、五百機立つる窓の内」

へ枝の鶯 糸繰り綿繰り 織りて着せたる母の秘蔵児 里へ

下がれば里の土産は でんでん太鼓に振り鼓 打つや空蟬の唐衣 千声万声の砧に合わす 鼓の拍子おもしろや

怪童「サアサアこれから馬ごとじや、馬ごとじや」

山賤「ドレドレおれがいい物を貸してやろう、この鉞を馬に

して」

山姥「母が離してやりましょう」

へ月毛にあらぬ斧の駒 取るや手綱の凜々しげに

怪童「さき退け、さき退け、さき退けろ」

山姥「お月様いくつ」

怪童「十三七つ」

山姥「お供はいいくつ」

山賤「八十八つ」

山姥「ほんにそりや若いなあ」

へ母の胎内蹴破つて 産所も産湯も山なれば 取り上げお婆に事を欠き 産湯の代わりに四方の赤 浴びせられたかど

つこもかも 真つ赤くなつて北嵯峨の踊り口説きは

山賤「なんと言た」

へおらが在所はな 奥山のでてうちでんぐりでんぐり

栗の木の 木の根を枕にござれ 抱いて転び寝

怪童「母、乳飲もう」

へ乳飲みたいと足摺りは 頑是なき子の習いかや

山姥「これはしたり、どうしたものだ。さあさあこれからまた

いつもの山巡りの話をして、聞かせましょうぞや」

山賤「なに山巡りの話、こいつは面白からうわえ」

山姥「マ何のいなあ、昔語りも恥ずかしい、在りし姿もどこへ

やら、無明の滝に髪洗い、若葉を見ては春を知り、妻乞う

鹿の音を聞いて、秋と思つて深山路を、明日明日の山巡り」

へよし足曳の山巡り 四季の眺めも色々に へ浮き立つ空の

弥生山 桃が笑えば桜が干反る 柳は風の鷹揚に 誰を待つ

やら小手招く 霞の帯の辛気らし 締めて手と手の盆踊り

へ七箇の池に移り気の 恨み過ごしの梶の葉は 露の玉章落

ち初めて 焦がれて濡らす袖の梅 つい騙されて室咲きの

へ梅の暦もいち早く門に松立ちやナンナ 対離も出るかと思

えば沓手鳥 菖蒲葺く間に盆の月 待つ宵過ぎて菊の宴 早

祝月 里神楽 ほんにほんに忙しき憂き世も我も 白雪積も

る山巡り山巡り

山賤実三田「ホホウ、このほどより心をつけて窺う所、さては柔弱非力を悔やみ、横死を遂げし坂田の蔵人が妻倅、こ

の山中に籠もると聞きしが、もしや二人は」

山姥 「いかにもその坂田の家を興さんと、山神へ祈誓をかけ、すなわち儲けしこの怪童」

三田 「さてこそ我が推量に違わず、時行が妻倅よな。さるにても女に稀なる志、その丹精に山神の加護、倅が勇力さぞあらん、力のほどが見たい見たい」

怪童 「面白い面白い」

山姥 「これこれ怪童、大事の所じゃ、負けまいぞ」

怪童 「才合点だ」

〽神変不思議の怪童丸 こなたは待あしう勇力士 怪童いら苛いらつて傍かたえなる松を根ね扱こぎに引き抜いて につこと笑つて立たつたりしは 人も恐るるばかりなり

三田 「松の根扱こぎ面白い、サア打つてこい、怪童丸」

怪童 「合点だ」

〽打うつてかかれば身をかわし すかさず剛氣の力こぶ 幹より腕の節せくれて しつかと掴めばメリメリメリ えんやえんやとねじ合あいしが 中よりフツツとねじ切きつて 左右へ別れて立たつたりしは 目覚めましかりける次第しだいなり

三田 「ホウ、力のほどは見えた見えた、今よりしては頼光公の家臣となし、父が家名をそのままに、坂田の、金時と名乗らせん、喜こべ喜こべ」

山姥 「ハハアありがたや、かたじけなや、コリヤ怪童、今日から坂田の金時という侍になるのじゃが嬉しいかや」

怪童 「そんならおれは侍になるのか、嬉しい嬉しい」

山姥 「さりながら今別るればこの母は、もう会うことはならぬぞや、コレ怪童ここへおじゃ」

〽夫の形見と見るにつけ そなたの大事さ大切さ 今日別るれば今宵より 母独り寝の閨の内 さぞ佛の懐かしかる 頼光公へ御奉公 勤むる暇の明け暮れに

山姥 「武術を励み立身せよ、必ず必ず人様に、山姥が児と笑われな、今別るるとも、この母が」

〽そなたの影身に付き添そうて なお行く末を護るべし とはいうもののこれがマア 名残惜しやいとおしやと 抱かき上げ抱かき付き 思おもわずワツと一声が 鈿つに響こきて哀あれなり

山姥 「かくては果てじ怪童丸、お頼たのみ申ますは仕つか様、名残は尽つきじ、早はやおさらば」

〽暇いとま申まして帰る山の 峰も梢も白妙は 源氏の栄え尽つきしなき 守る神垣は妄執の雲の 塵積もつて山姥となれり 山また山に山巡りして 行方も知れずなりにけり

